

令和3年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全16ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示りょうにしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 ぼうせん部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 納屋の整理をする。
- ② 遊説を聞く。
- ③ 家族で供養する。

問2 ぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい（送り仮名がある場合はひらがなで答えなさい）。

- ① 船に乗ってリヨウに出る。
- ② 親にカンショウされたくない。
- ③ 飛行機をアヤツル。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 一つ、なぜゴジラは、いつも日本にやってくるのか。この教室にも南太平洋を囲む国からやってきている留学生がたくさんいるはず。一度くらい、そのあなた達の国、たとえば香港に立ち寄りたり、ハワイに向かったり、オーストラリアならケアンズ、ダーウィンあたりまで南下してもよさそうなものである。それなのに、何度も繰り返し、日本だけをめざしてやってくる。そしてそのことを、日本の観客の多くがまた不思議に思わないで当然のように考えてきた。それは、なぜなのだろうか。

そして、この問いに対する私の答えは、こういうものだった。

そのことは、ゴジラが、戦後の日本人にとって、第二次世界大戦で死んだ兵士たち——客観的相関物[※]、つまりその体現物として、むろん無意識のうちになのだが、受けとめられていることを示唆[※]しているのではないだろうか。つまり、ゴジラは、やってくるのではない。帰ってくる。フランス語で再来者は「亡霊^{れい}」を意味するが、ゴジラも同じ。彼^{かれ}、ないし彼らは、あたかも亡霊であるかのように「再来」してくる。そう考えたほうがよいのではないだろうか。

X そうだとしたら、なぜ彼らは、そのような奇妙な仕方^{きみょう}で、帰ってくるのだろうか。先の戦争の死者たちは国のために戦った。しかし、戦争に負けた後、戦後の日本では国が方向転換^{かん}した。そのため、いま日本の小中学校で、七〇年以上前、日本が戦争した国はどこかと聞くと、アメリカ、と答える生徒はもう少数派^{せうすう}だという。その結果、かつて敵と戦った彼らには帰る場所がない。その証拠^{しよこ}に、東京に上陸し、復興^{ふきん}なった夜の都市を蹂躪^{しゆりつ}するゴジラの咆哮^{ほうこう}は、「自分がそのために死んだ国は、どこにいったのだ」、「祖国はどこにいった?」と、嘆^{なげ}いているようにも聞こえる。

一方、戦後の日本人は、どうすれば戦争の死者と向き合うことができるのか、本当のところ、そこがもうわからなくなっている。

【中略】

そして、そういうなか、戦後の日本人にとって、戦争の死者は、「なつかしい」、「恩義も感じる」と同時に「うしろめたい」、面と向かって会うのが「恐ろしい」、そういう多義的な存在——不気味(ウンハイムリッヒ)な存在——に変わってしまった。

ゴジラは、当初、原水爆^{ばく}の恐怖^{きょうふ}の権化^{けんげ}としてつくられたのだが、観客の目にさらされると、そのさまざまな矛盾^{むじゆん}の凝集^{ぎせう}体として、スクリーン上に焦点^{しよんてん}を結ぶことになった。だから、最後、第一作でゴジラが芹沢博士^{せりざわ}とともに断末魔^まの咆哮^{ほうこう}をあげ、東京湾^{わん}の底^{そこ}に沈^{しず}むと、それを見る者は、ほつとすると同時に、その死に、一抹^{いっまつ}の言いようのない悲哀^{あい}を感じる。ゴジラは、妙^{みょう}に「後を引く」。そういう不気味な存在として、日本の社会に受けとめられ、受けいれられ、ある意味で、なくてはならないものとなっていたのである。

二つ。Y、その後、ゴジラは、明るく、軽くなっていく。第二作以後、たくさんの怪獣かいじゆうのなかの一つへといわば「相対化」され、やがて人間の味方にもなり、子をなし、しまいには、コミカルに、当時のギャグである「シエー」という身ぶりでおどけすらすらようになる。ゴジラは、子どもと一定の愛好者を相手にしたゴジラの映画会社、東宝映画の夏の定番へと変わっていく。そして新しい活路をそこに見出す。そこから次の問いがやってくる。

ではなぜ、ゴジラは、その後、半世紀にもわたって、劣化せうかを遂げ、一部のマニア、あるいは学童向けのチープなエンターテインメント・アイテムに身を落としながらも、細々とつづられ続けるのだろうか。なぜ、戦後の日本人にとってゴジラからきつぱりと手を切ることは、かくも難しいこととなるのか。

この第二の問いに対する私の答えは、こうである。

先に述べた、多義的な不安の淵源えんげんをなす、不気味な存在とは何のことだろうか。この概念がいには独特な性格が伴ともなっている。それは、単に怖い、ということではないからだ。たとえばホラー映画で外から未知の殺人者がやってくることは十分に怖い。けれどもその殺人者が、実は自分のすぐ身近な隣人、あるいは、家族の一員だったりしたら、その意外さに、私たちはさらに深く戦慄せんりつし、ぞっとするのはないだろうか。フロイトは、むしろ身近なものがその隠された姿を露呈ろていするときのほうが恐怖は深い、というこの奇妙な事実じじつに示唆され、その恐怖は単なる恐怖とは異なると考え、これを「不気味（ウンハイムリッヒ）なもの」と呼んだ。ドイツ語に言うウンハイムリッヒとは英語に移せば、反・ホーム的、アン・ファミリアーであり、怖いものと身近なものが重なるところ、その相矛盾する潮境で意味が多義的に拡散する地点にピンを刺している。親しさのその反転の動きに、不気味なものは宿るのである。

ゴジラは、単に怖いのではない。Z、原水爆の恐怖というだけではない。それは、身近なもの、つまりかつての自分の身近な死者Ⅱ戦争の死者たちが、遠ざけられ、素直に哀惜あいきできないばかりに怖いものへと転移した、その姿でもある。だから、戦後の日本人は、これを恐れる。しかも、それが消えると、一抹の寂しさ、哀切の感を禁じえないのだ。

では、どうすればこのやっかいな不気味な存在としてのゴジラを撃退げたいできるのか。退治できるのか。それは、単に押し戻し、圧伏おさするだけではない。それは再来者Ⅱ亡霊なのだから。これを退治するには、逆に、これをなんとか自分たちに同化し、消化して、無害化、衛生化するしかない。「こわい」ものなら撃退すればよい。しかし「不気味なもの」は撃退できない。これを無化し、退治するには、この「こわい」ものを「かわいい」ものに変える、「かわいく」する以外には方法がないのである。

こうして、「不気味なもの」を、日本の社会にとって無害な、むしろ「かわいい」存在になるまで、飼慣らし、馴致じゆんちすることが、その後、日本

の文化を駆動する一つの導因となる。その「不気味なもの」から「かわいいもの」に向けての逃走の切実さが、「ハローキティ」をつくり、「ポケモン」をつくり、というように、あれほど多くの「かわいい」アイテムの出現をその後日本文化に促すのである。

そして、この「戦後」性ともいべきものの枯渇が日本社会の全体に及ぶようになるとはじめて、日本人はもはやゴジラを無害化する必要から解放された。二〇〇四年、ゴジラは退場する。そして、二〇〇六年、「かわいい」ものの席卷が朝日新聞の元日の第一面に報じられるが、見回してみれば、日本社会は「かわいい」ものに取り囲まれ、満ちあふれ、「かわいい」ものこそが、新たな日本の文化輸出の世界に向けた主体となっているのである。

(加藤典洋『敗者の想像力』より)

※相関……一方が変化すれば他方も変化する関係。

※示唆……それとなく教えること。

※蹂躪……踏みにじること。

※咆哮……吠えること。

※権化……化身。

※一抹……ほんの少し。

※チープ……安っぽい。

※淵源……源。

※概念……同類のものに対して抱く意味内容。

※露呈……隠れていたことがあらわになること。

※哀惜……人の死を悲しみ惜しむこと。

※馴致……慣れさせること。

※枯渇……干上がって水がなくなること。

問1 ぼうせん部①「なぜゴジラは、いつも日本にやってくるのか」とあるが、筆者はその理由をどのように考えているか、答えなさい。

問2 X、Y、Zに当てはまる接続詞としてふさわしい組み合わせを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	X	例えば	Y	つまり	Z	また
イ	X	さて	Y	ところが	Z	しかし
ウ	X	しかし	Y	ところで	Z	つまり
エ	X	もし	Y	そして	Z	むしろ

問3 ぼうせん部②「ほっとする。と同時に、その死に、一抹の言いようのない悲哀を感じる」のはなぜか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ようやく戦争の死者と向き合うことはできたが、恩を感じていたゴジラはいなくなってしまったから。
 イ 目の前から脅威が消え去り、日本のために戦争で尽力してくれた人々の魂が失われてしまったから。
 ウ 死者との懐かしい記憶はよみがえったが、ゴジラと共に芹沢博士がいなくなってしまったから。
 エ 原水爆の恐怖を覚えてくれるものが、不気味な存在として消滅させられて、悪者になってしまったから。

問4 ぼうせん部③「劣化を遂げ」とあるが、「劣化」とはどのようなことか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今までゴジラが持っていたイメージを捨て去り、なじみやすいものとして生まれ変わった、ということ。
 イ 今まで一部の人にしか理解できなかった難解なストーリーが大衆に受け入れられるようになった、ということ。
 ウ 時代とともに人間の科学技術が進歩したことで、ゴジラの力が弱弱しく見えるようになってしまった、ということ。
 エ ゴジラが長い年月を人間と対立して戦うことにより、体力的にも精神的にも衰えてしまった、ということ。

問5 ぼうせん部④「逃走の切実さ」とあるが、どのような「切実さ」か。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身近でない「不気味なもの」から、飼いや慣らせる「かわいいもの」へと育てあげなければならない、という切実さ。
 イ 理解しにくい「不気味なもの」から、分かりやすい「かわいいもの」へと進化しなければならない、という切実さ。
 ウ 一つしかない「不気味なもの」から、大量生産可能な「かわいいもの」へと好みを変えなければならない、という切実さ。
 エ 受け入れられにくい「不気味なもの」から、好まれる「かわいいもの」へと移行しなければならない、という切実さ。

問6 ぼうせん部⑤「この『戦後』」に合うものとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ゴジラを不気味な存在として認識していること。
- イ 「ピカチュウ」や「ハローキティ」などを産み出すこと。
- ウ ゴジラを東宝映画の夏の定番へと変えていくこと。
- エ ゴジラの代わりに「かわいい」ものを再来者として認識すること。

問7 本文の内容として正しいものには○で、間違っているものには×で答えなさい。

- ア 身近な存在であればあるほど、その裏に隠された姿を目の当たりにしたときの恐怖をフロイトは「不気味」と命名した。
- イ ゴジラは原水爆の恐怖を形にしたものとして産み出されたにも関わらず、製作者が意図していないところで観客によって不気味な存在に変えられてしまった。
- ウ 戦争の死者たちが守りたかった日本は、国の方向転換により姿を消してしまったため、戦後の日本人は戦争の死者との向き合い方が分からない。
- エ 日本人がかわいいものを求める根底には、不気味なものを自分たちに同化させようとする脅迫観念があり、常にその焦りと不安が新しい文化を生み出す原動力になっている。
- オ 身近な恐怖に宿る不気味さは「アン・ファミリーア」と言い、一般的な恐怖に宿る不気味さとは異なった性質を持っている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現在二十八歳^{さい}であるアキは、二十年ぶりに戻ってきた思い出の地で急に眠^{ねむ}くなる。目を覚ますと、外見は二十年前に戻ってしまい、その当時、確かに遊んだ「仲間」が昔のままで存在していた。そして、二十年前の夏休みに起こった出来事を、アキは再度仲間とたどることになる。なお、本文における「カブ」とは「カプトムシ」のことである。

それから二人で試行錯誤^{しぎく}の日々がはじまった。

色々とオリジナルの蜜^{みつ}を作ってみては、試していく。

「うーん、これはいまいちかな……」

「だな。カブたちよりもカナブンのほうがあつまってきてやがる」

「じゃあもうちよつと砂糖をふやしてみよっか？」

「おう。お、さつきよりもいいかんじじゃないのか！」

みんなやニャン太と遊んでいる以外の時間、ほとんどをそれに費やした。それだけじゃたりなくて、家に戻^{もど}ってきた後にも研究を続けて、叔父^{おじ}さん叔母^{おば}さんや久美ちゃんを巻き込んでしまうこともあった。

「ア、アキくん、冷蔵庫に入ってた、これ、なに？」

「え？ 今タケオといっしょに作ってるカプトムシ用の蜜だよ」

「カ、カプトムシ……？ ハチミツだと思っておじさんなめっちゃったよ……」

「え？」

「だってほら、この瓶^{びん}、ハチミツって書いてあるから。見た目が似てるから、間違えちゃったんだよね」

「！ ご、ごめんなさい！」

どうやら蜜用にと叔母さんにもらった瓶のラベルをはがし忘れていたらしい。とはいっても匂いが明らかにハチミツとは違うからまさか食べてしまった人がいるとは思わなかったけれど……

「気にしないで大丈夫よ、アキくん。この人、腐^{くさ}ったスイカを食べてもけろりとしてた人だから」

「おとうさん、アキちゃんのたいせつな蜜をたべちゃだめだよ……」

「だれもおじさんの心配はしてくれないんだ……」

がつくりと肩かたを落とす叔父さん。うーん、叔父さんには悪いことをしちゃったな。

またいかに大まかなレシピが分かっているとはいっても、実践せんしてみると色々難しく、失敗もたくさんあった。

「うわ、なんだこれ、くせえ！」

「はっこうさせすぎちゃったのかな……真っ黒になってる」

「これ、牛にゆうをふいてそのまんまにしておいたぞうきんのおいだって……えんがちよだ。アキ、すててこいよ！」

「い、いやだよ。タケオが捨ててきなよ」

「お、おれだつていやだよ。じゃあじゃんけんな。さいしよはグー、じゃんけんぽん！」

「じゃんけんぽん」

「げ、まけた……」

「あとだして負けるって、タケオらしいね……」

なかなか思うようにはいかない。

ただけど二人でああでもないこうでもないと言いながら、色々が悪戦苦闘とするこの時間が、何だか楽しかった。

「なんか、こうしてアキと二人でなんかをやるって、いいな」

「え？」

「アキとはなつやすみの間しかいられないけど、こうしてるとクラスメイトみたいっていうかき。自由けんきゆうをふたりでやってるみたいなものかな。なつやすみ、ってかんじがするぜ」

「タケオ……」

「へへ」

嬉うれしかった。

クラスメイトみたいだつて言ってくれたこともそうだし、タケオがボクと同じことを考えていてくれたこともそうだ。タケオとはもともと仲が良かったけれど、この蜜作りで、何だかその距離きょりが、また一歩近くなったような気がする。

そして――

「……できた……」

「できた……ね……」

三日後。

ボクたちの手には、濃い琥珀色をした液体が入った瓶があった。

『タケオ・アキスペシャルミックス』

紆余曲折の末に完成したそれは、そう名づけられていた。

「何でタケオの名前が先にくるのさ」

「いいだろ。うちのビールがひみつへいきになってんだから。へへ」

「もう……」

そう、蜜の隠し味(?)として使ったのは、ビールだった。

カプトムシやクワガタというのは、樹液の糖分が発酵することにより生じるアルコールの匂いに引かれてやってくるらしい。その習性を利用したのがこの特別製の蜜だった。幸いなことにタケオの家にビールはたくさんあったので、材料調達には困らなかった。

「とにかくこれでカブたちのふっかつまぢがいなしだな！ さ、カブ狩り場にいくぜ！」

「うん！」

二人で意気揚々と「カブ狩り場」へと向かい、『タケオ・アキスペシャルミックス』を木へと塗りつける。

そして翌日再び「カブ狩り場」に、今度はモミジたちともいっしょに赴くと……

「すごい……どうしたの、これ!？」

「……いっばい」

「カプトムシにノコギリクワガタにヒラタクワガタ……あ、ミヤマクワガタもいるね」

モミジたちが歓声をあげる。

『タケオ・アキスペシャルミックス』を塗りつけた木には、両手では数え切れないほどのカプトムシ、クワガタが群がっていた。

大成功だった。『カプトムシ消失事件』が起こる前ですら、これほどの数が集まるのは珍しい。タケオも、ボクも、モミジもカイ兄ちゃん、ウミちゃんたちも、夢中になってとった。みんなの虫かごがいっぱいになっても、まだ木には何匹ものカプトムシ、クワガタが残っていた。

「やったな、アキ！」

「うん！」

二人顔を見合わせて満面の笑みを浮かべる。

最大のレアものであるオクワガタがとれなかったのは少しだけ残念だったけれど、それでも大満足な結果だった。

「やったって……アキたちが何かしたの、これ？」

「おう、そうだぜ！ これも『タケオ・アキスペシャルミックス』のおかげだな！」

『タケオ・アキスペシャルミックス』……？』

「おうよ。おれとアキとでかいはずした、ひみつへいきだぜ。カブたちをひきよせるみつなんだよ」

タケオが自慢げに蜜の入った瓶をちらつかせる。

「ただモミジはじーっとタケオとボクの顔を見比べると、きっぱりとこう言い切った。

「これ、かんがえついたので、アキでしょう？」

「え？ な、なんでそうおもうんだよ」

「だってタケオにこんな頭をつかうこと、かんがえられると思えないもん。アキだったら、なんとなく思いつきそうだけど」

「そ、それはそうだけどう……」

タケオが声を小さくしてそう口にする。自分の思いつきだと強く主張しておけば分からないだろうに、こういう嘘がつけないところもまたタケオのいいところなのである。

「うん、でもほんとうに解決するとは思わなかったよ。やるじゃん、アキ」

ドンと左手でこっちの背中を叩いてモミジがヒマワリのような笑みを浮かべる。

「そ、そうかな」

「うん、こんな風にはずばつと解決してくれるなんて思わなかった。その、ちょっとだけ——かっこいいよ」

「これ、アキがおもいついたのか。すごいね」

「……こうくるとはおもわなかった」

ニヤー。

カイ兄ちゃんたちも驚いた顔でそう褒めてきてくれる。そのことは素直に嬉しかった。我ながら根が単純だから、事がうまくいけば嬉しいし、褒められれば喜ぶ。二十八歳でも八歳でも、それは変わらない。

こうして、一度目のなつやすみでは未解決だった『カブトムシ神隠し事件』は無事に解決された。ただ、どうして『カブ狩り場』で急にカブトムシがとれなくなってしまったんだろう。その原因だけは、分からずじまいだった。

「よし、それじゃあさつそく虫ずもうをやろうぜ！ だい一かいタケオ大会だ！」

『カブ狩り場』での大収穫を手に、秘密基地に戻ったボクたちに、タケオがそう大きく声を上げた。

「ちよっと、どうしてタケオの名前がついてるのよー」

「そりゃあもちろん、カブたちがまたとれるようになったのが『タケオ・アキスペシャルミックス』のおかげだからじゃん。なあ」

「だからそれはアキが思いついたんでしょ？ だったら第一回アキ大会じゃない」

「ぐ……こ、こまかいことはいいじゃんか。ほら、やろうぜやろうぜ」

「もう……」

口をとがらせながらも、モミジもタケオにならう。

秘密基地に置いてある、虫ずもう用の土俵。新聞紙とダンボールとで作ったその上で、カブトムシ、クワガタたちの熱戦が繰り広げられる。

「よし、おれのかち！」

「っ、タケオに負けるなんて……」

土俵の上でひっくり返されたヒメクワガタを見てモミジが悔しそうに声をあげる。

「ま、これがじつりよくてことで。へっへっへ、じゃあかったおれさまのノコクワにはごほうびをあげないと。アキ、ちよっと『タケオ・アキスペシャルミックス』もらっていいか？」

「うん、いいよ」

うなずいてタケオに蜜が入った容器を渡す。

「——っ、これはちみつじゃんか！」

「え？」

「ほら、この色とにおいはまちがいねえって。はちみつだつてば」

確認してみると、タケオの言った通り、容器の中に入っていたのは黄色いハチミツだった。どうやら今度は『タケオ・アキスペシャルミックス』かと思つて間違つてハチミツを持つてきてしまつていたみたいだ。容器は同じだし見た目はほとんど変わらないから、貼つてあるラベルを頼りにするしかないんだよね——

「……え？」

そこではつとまった。

見た目はほとんど変わらないから、貼つてあるラベルを頼りにするしかない。

自分の言葉を、もう一度頭の中で反復する。

そうか——もしかしてこれって、そういうことなのか。

何かが繋がった気がした。見た目が似ているものを判別するには、^⑤その外側にある目印を基準にするしかない。あの時はあまりにも自然で気づかなかつたけれど、^⑥そうだとしたら色々なことに説明もつく。

「？ どうしたのアキ、^⑥むずかしい顔して？」

「え？ あ、う、ううん、なんでもないよ」

「??」

モミジが不思議そうな顔で尋ねてきたけれど、その場は何もない風に返しておいた。

そうして、みんなと別れた後に、一人で「カブ狩り場」へと続く雑木林へと行ってみた。

そこには、思った通りの結果があつた。

それは……カブトムシがとれないわけだ。

突然神隠しのように消失してしまった、わけだ。

だってボクらは……違う場所へ行っていったんだから。

辺りを見回す。周囲にあるのは、どこまでも似たような雑木林の風景。よほど注意して見なければ、それがいつも目印にしていたくぬぎの木と違うなんてことには気がつかない。

でも、どうしてそんなことをしたんだろう？

分からない。

だれがどうやってそうしたのかはだいたい分かったけれど、その動機が分からなかった。

「……」

一度目のなつやすみでも、同じことが行われていたのだろうか。

心の中で大きく息を吐いて、そっと木につけられた分岐のリボンを、元の位置に戻したのだった。

(五十嵐雄策『ぼくたちのなつやすみ』より)

※琥珀色……赤と黄色の中間色。

問1 ぼうせん部①「オリジナルの蜜」とあるが、最終的に完成した蜜はどのようなものか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アキとタケオが二人だけで作成した、砂糖を付け足したことで甘みが増し、おいしくなったもの。

イ アキとタケオが何日もかけて作成した、色味が濃い琥珀色をした、アルコールの匂いのしたもの。

ウ アキとタケオが夏休み期間のみを使い作成した、アルコールを発酵させた、ハチミツとは匂いが異なるもの。

エ アキとタケオがみんなに内緒で作成した、隠し味にビールを使用し、アルコールの作用でこくが増したもの。

問2 ぼうせん部②「うーん、叔父さんには悪いことをしちゃったな」とアキが感じたのはなぜか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作成したカプトムシ用の蜜を、家族の不注意のせいで、何も知らない叔父さんが間違えて食べてしまったから。
- イ 完成した蜜を叔父さんが黙って食べてしまい、そのせいで家族との関係がこじれてしまったから。
- ウ 叔父さんが匂いの強い蜜を平気で食べてしまったことで、家族に鼻が悪いことを気づかれてしまったから。
- エ 自分たちが作成したハチミツを間違えて食べてしまった叔父さんが、家の人たちに雑に扱われてしまったから。

問3 ぼうせん部③「同じこと」の内容として、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何も知らなかった二人が、夏休みの蜜づくりを通じて、急速に仲良くなり、心の底から打ちとけあえたこと。
- イ 夏休みという短い期間の中で、お互いをよく知り合い、仲良くならなければいけないということ。
- ウ 限られた時間の中での一つの体験を通して、二人の仲がより深まってきたこと。
- エ 期間限定であるにもかかわらず、二人が二人ともお互いと仲良くなりたいたいと思っていたこと。

問4 ぼうせん部④「こんな頭をつかうこと」とあるが、どのようなことか。説明しなさい。

問5 ぼうせん部⑤「その外側にある目印」とあるが、これに当たるものを二つ、本文中からぬき出しなさい。

問6 ぼうせん部⑥「むずかしい顔」とはどのような顔か。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 答えをどのように説明したらいいのか困っている顔。
- イ 難題に対してひるむことなく積極的に向かっていく顔。
- ウ 周りに考えていることが悟られないようにごまかしている顔。
- エ 原因を把握できていないという不安で余裕のない顔。

問7 本文における「タケオ」の性格としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友人からの指摘てきに思わず正直な反応を見せる、うそをつくことができない素直な性格。
- イ アキの意見を全く聞き入れず、自分の考えだけでひたすら蜜をつくる頑固がんな性格。
- ウ 周りの友人に対して臆おそすることなく強く意見を言い、自分本位に振舞まうわがままな性格。
- エ カブトムシが捕れなくなったのは自分のせいだと思い、その責任を一心に背負うまじめな性格。

問8 本文の特徴ちゆうとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア アキの実際の年齢を感じさせような思考や判断をあえて書かないことにより、幼さを強調している。
- イ 表現技法を多く用いることで、小学生たちの様子を分かりやすく鮮明せんに描き出し、アキとの違いを浮き彫りぼりにしている。
- ウ タケオのセリフにはひらがなを多用することで幼さを残し、アキとの実際の年齢れいの差を表現している。
- エ 現在と過去の出来事を比較かくしながら描くことにより、当時の仲間たちの幼い考え方を際立たせている。

四

次の各問いに答えなさい。

問1 空らん ①・② にふさわしい言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

・落とした鍵を①探し回ってみても仕方がない。

ア いたずらに イ ふがいなく ウ おぼつかなく エ かすかに

・スポーツ万能な兄に②をいただいた。

ア 優越感 イ 先入観 ウ 劣等感 エ 人生観

問2 ことわざの意味としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

・瓜のつるになすびはならぬ

ア ある原因からはそれ相応の結果しか生じないということ。

イ 一見同じように見えるが、実際は異なっているということ。

ウ なじみのない場所だと、本来の力を発揮できないということ。

エ 予想した結果と異なることも、起こりうるということ。

問3 四字熟語を完成させるため、空らん⁽¹⁾にふさわしい漢字を答えなさい。

・公平無⁽¹⁾ (かたよらず平等で、個人的な判断に走らないこと)

以下余白

—